

詠む広場

毎日歌壇

船橋子の手紙の詠る田舎た
野田市 塩野谷慎吾
長刀鉾風を切り取り舞ひにけり
相模原市 はやし 央
夜干梅園に耐へたる三日かな
筑西市 大久保朝一
聞き流す母の繰り言青りんご
行田市 吉田 春代
遊船や海よりスカイツリーの灯
千葉市 高橋 信子
川越市 大野有之介
軒下にあれこれ干して梅雨ごもり
小平市 齋藤 幸枝
スワトウの使はぬままのハンカチー
福岡 手島喜美江
フ
麦秋やこの世に忘れがたき人
安中市 佐藤 志乃
雲の峰目さして歩くほかなし
神戸市 大田 雅一
米子市 長田 遼平
白シャツに孕む光や風青し
姫路市 三木 崇弘
コップ酒饅頭の叩きを前にして
鈴鹿市 岩口 巳年
山小屋の夏炉は燃えて旅の日々
三鷹市 羽継原内丘
雨戸越し響く雨音梅雨に入る
所沢市 白川真記子
兵庫 小林 恕水
小満の雨しづかなる一日かな
西宮市 平田 あい
棚雲の上に乗るたる梅雨の月
所沢市 堀 正幸
五月晴貨物列車の汽笛二度
磐田市 大石 志づ
葉桜に隠れし小店団子食ふ
北杜市 井口 和

調べの鼓動

いもので、作者は長くと居ていても、読者は良いと思わないことがよくある。他人の目を通すのは大事なことだ。句碑除幕式は7月9日。日本語と英語両方の表記で句碑に刻まれる。句碑には海がよく見える。勝浦という町は、その名の通り海の美しい町だ。ファンロ、パウさんも勝浦や御宿が好きだという。ご自身の俳句を日本の海に飾るといふのは、珍しい縁だと思ふ。海のように、句の縁が世界に広がっている。折しも本年はベルギーと日本の国交樹立160周年である。(ほしの・たかし)俳人

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

存在と無を回りつつ観覧車ぼろーんぼろーんとほく消えゆく
垂水市 岩元 秀人
△評▽観覧車は存在と無の領域を回っている。やがて消えてゆく。無が存在を覆ったのだろうか。オノマトペの遊戯性がよい。
カラーンと滑らかに開く引き出しが好きだった
たな事務の仕事は 広島市 堀 眞希
△評▽引き出しの滑らかさを喜ぶ。個性的で楽しい。生き生きとした心がよい。
君は愛するかりハビリの電極でぐるぐる巻きにされた私を
岐阜市 山上 秋恵
「戦争の顔をしてみる」屋シネマ横目に読んだアレクシエーヴィチ 札幌市 人子 一人
ヤバかりきマジあかねさす太陽の五月の紫外線.com
雲南市 熱田 俊月
接岸の船があんなに揺れていて思い出せない約束ばかり
川崎市 新井 将
新緑の木々は愛でられ下草はガソリン草刈り機で刈られる
大津市 佐々木敦史
われに似たひとがくずれてねむってる始発電車の一番すみに
東京 青木 公正
室生寺の五重塔は今の世も地上に降り立つ天女のごとく
瀬戸市 宮崎 諭志
タイ焼きを背鰭から食う春である別れを切り出すのはきときき
横浜市 井上 整
ふと夜をあかるく思ふ記憶にはない鳥がまたこの世にはいて
東京 境 千尋
△評▽この世の関節が外れる瞬間である。あかるい夜に飛んでゆくあたらしい鳥はあなただろうか。
言葉をしんじることもないだろう刺繍画のなかあかるい人びと
横浜市 大原 香花
△評▽いいえ、わたしたちも言葉を信じています、と彼らはあかるく答えるだろう。
夜から夜を盗みくるとき南島へあなたが落ちてしまった靴よ
国立市 蔵 井
あぢきみの王宮 君のをらざれば甘やかに尖る雨粒の角
東京 吉岡 耕大
きりもみでこの世へ産まれ落ちてきた螺旋模様のつむじに刻む
甲府市 村田 一広
母さんが書いた学校までの地図には敵たちは一人もいない
千葉市 深海 泰史
鯉の背に池の深さを知るようにきみは戸惑うきみの言葉に
横浜市 街川 二級
ふれること、まみれること、しずむこと 春よすてきなすてきな水葬
安城市 唐澤 うに
エアコンの風に揉まれてががががが天使の羽根のように吾へ降る
秋田市 吉行 直人
蟬集するコムラサキほどの集まりを家族と呼べば盆暮れ憎し
豊橋市 氏原 維持
評判のいいラーメン屋探しく山形市民のサイドプレイス
山形市 佐藤 紀之
△評▽第3の場所とは自宅など別の居心地のいい場所。それがラーメン屋というのが面白い。さすがラーメン県・山形。
日光と京都の湯葉の食べ比べ精進料理を舌が旅する
宇治市 濱岡 学
△評▽湯葉の名産地の食べ比べを「舌が旅する」と歌ったのが巧み。食通の作者だろう。
シリカゲル捨てられたあとに残された煎餅たちの不安3日目
松戸市 小林 里純
勝守ばかり集めて心だけ鎧うわたしは何と戦う
たつの市 浅水 しお
すこしだけ癡狂な自己に気がついて甘めの味にする卵焼き
東京 奥山いずみ
五月雨に梅干しまぜて飯を炊く祖母の背中のみる懐かし
春日井市 月夜の雨
眠られず歌集ひらけば灯のもとにめくる頁は蝶の羽のよう
由利本荘市 佐々木静江
すきとほる水の底ひに蜩のいのち安らふ釜ゆでのまへ
東京 浅倉 修
信じてる神が違ふというだけで煙が絶えぬ神らの憂鬱
筑紫野市 桂 仁徳
何のため生まれて来たか知る前にガザの子どもは死なねばならぬ
筑紫野市 二宮 正博
花の名をさりとて言っておいてゆく認知の祖母に昔は開く
奈良市 浦城 亮祐
△評▽花が好きで名前もよく知っていた祖母。そんな祖母に名を言っておいてほしいとでもいうようにつぼみが開く。下句が印象的だ。
ママ友がマンションを売りじゃあねってギャンブル依存の夫と去りぬ
横浜市 友常 甘酢
△評▽何気ない「じゃあね」の一言にどんな気持ちが入められていたか。心配だ。
手動式でまも胡椒もコーヒも見て触り嗅ぎ聞きながら挽く
つば市 松井り子
「重要」と書かれし東に亡き夫がわかれ恋う文のひっそりとあり
千葉市 中村キヨ子
「りくりゅう」の「金」の余韻の残る「金」の闇の世「トクリュー」現はる
檀原市 神谷 和美
ふるさとと生まれたときからシャッター街そのシャッターも少なくなった
東京 藤沢 静二
茶碗しづむ流しの桶の水しづか救急車はいま角で止まりぬ
東京 浅倉 修
今朝早くペランダにとまり画眉鳥が私に語る天地創造
東京 河野多香子
自宅での葬儀なれば「鯨幕」を若きは知らず文明に生く
津市 林 榮二郎
世間体の「共白髪まで」はキレイごと価値観の一致なんてないのだ
春日市 林田 久子

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)宛へ

戦後81年「戦争・平和」の作品募集

81回目の「終戦の日」に合わせ、戦争や平和について詠んだ短歌と俳句を募集します。通常の投稿(ネットとはがき)で受け付けます。締め切りは7月31日(必着)。7月28日10日の本欄で掲載します。



こちらから投稿できます